

座談会

高校で実施するキャリア教育と 高大接続面での課題

大学における社会的・職業的自立のための教育がより重視される方向にある今、高校ではキャリア教育をどのように考えて行い、また大学の取り組みやその広報についてどのように捉えているのだろうか。茨城、栃木、群馬、長野の4県5校で進路指導を担当する教員に忌憚のない意見を交わしていただいた。

座談会出席者：茨城県立総和高等学校 野村 正昭 教諭
 栃木県立足利高等学校 乙黒 晃 教諭
 群馬県立高崎北高等学校 塩原 秋雄 教諭
 群馬県立前橋高等学校 荒木 隆 教諭
 長野県・私立佐久長聖高等学校 飯島 千尋 教諭

司会：進研アド Between 編集長 長田雅子

高校における キャリア教育の実情

司会 「生きる力」を身に付け、社会人・職業人として自立していくための教育が重視されるようになっていきます。高校ではこうした「キャリア教育」をどのようなお考えで進めていますか。

飯島千尋教諭（以下、飯島） 「キャリア教育」という言葉は、漠然としていて、正確に捉えきれていない面もあるのですが、私自身がキャリア教育を進めるうえで大切だと考えているのは、生徒に「学ぶ力」を付けさせることです。学ぶ力のある生徒は生きる力もありますし、大学を卒業した後も活躍しています。

本校は大学進学をめざして入学する生徒が多いので、1年次の4月に進学講話をして、10月には地元・信州大学などの教員による出前講話を行います。進学講話では、長野県の企業の最新データを収集して生徒に将来の就職への関心を持たせています。

塩原秋雄教諭（以下、塩原） 本校は群馬県の中では進学校と言われています。生徒は皆、授業や課題に真面目に取り組んでいます。「自ら取り組む力」が少し不足しているように思います。この「自ら取り組む力」を3年間でどのように身に付けさせるかがキャ



リア教育の一つではないかと思っています。この力は大学生活の土台にもなるでしょう。

進路サポートとしては、1、2年次に社会人講師の話を聞く時間を設け、2年生にはオープンキャンパスへの参加を義務付けています。これらの取り組みでは、聞くだけ、行くだけではなく、必ずそこから考えたことを発表する場も設けています。

荒木隆教諭（以下、荒木） 本校では、キャリア教育が声高に言われるようになってから特に「何をしよう」と考えたことはありません。総合学習が取り入れられて以来、この時間を活用して主体的・自主的な学習を進めてきたからです。これらを通してキャリア教育

の趣旨は十分に生かしていると思っています。

1、2年生は自らテーマを見つけ、最後に論文を仕上げます。その一環として1年生には関西、2年生には東京の大学の研究室や企業を訪問させています。このとき、生徒たちには「良質な失敗」を体験してもらいたいと考えています。東京では、現地集合、現地解散にしています。多少の遅刻も発生しますが、そのときの対処が生きた体験になります。主体的に動くこと、何かに挑戦する場合にリスクを背負う可能性があることを理解させるのも、キャリア教育の一つではないかと私は思っています。

乙黒晃教諭（以下、乙黒） 本校の生

徒は全員が大学進学を希望して入学してきます。ですから、周囲がキャリア教育に注目する以前から、生徒を大学に進学させる意味を考えながら進路指導を行ってきました。この指導がすなわちキャリア教育だろうと思っています。

進学をめざす生徒でも、話を聞いてみると、本人も保護者も大学がどういうところかをよくわかっていないケースが多くあります。そこで実際に大学の講義や研究施設などを見学させています。2011年は、1年生全員が新潟大学へ、また、保護者も横浜国立大学へ、それぞれの大学にご協力いただき訪問してきました。

このほか、1年次は社会人講師に職業観ややりがいなどについて聞き、その仕事に就くためにはどういうキャリアが必要か、自分はなぜ大学に行くのかを考えるきっかけにしています。これは自己分析ができる体質づくりと言えるかもしれません。

2年次には大学の出張講義でレベルの高さや学びのおもしろさを実感させ、3年次には自己実現のための大学研究や職業研究を行います。大学で何をしたいのかを自分で考え、納得して入学すれば中途退学することもなくなるのではないかと考えています。



野村 正昭 教諭(茨城県立総和高等学校)

野村正昭教諭（以下、野村） 本校の生徒は大学・専門学校への進学、公務員や一般企業への就職など、さまざまな進路に分かれます。そのため、生徒のニーズを満たす進路指導がキャリア教育だと思っています。

本校は2005、2006年の2年間、文部科学省委嘱のキャリア教育推進地域指定事業として研究活動を行ってきました。具体的な取り組みは1、2年次のインターンシップや大学の出張講義、進路（職業）講話や、先輩の進路選択について聞くキャリアデザインセミナーなどでした。

その後、大学の教員に来ていただくのではなく、生徒に大学へ行かせることにしました。大学の協力を得て模擬授業を実施していただいたり、生徒の学習意欲を喚起しています。これは筑波大学、茨城大学、茨城県立医療大学の協力なしにはできませんし、東京の総合大学にも協力をいただいています。

本校のある古河市は県内で4番目の規模の工業地帯で60の事業所があります。各企業の人事課長においでいただき、学年ごとに進路講話を開催したり、少人数制セミナー形式で就職ガイダンスを行っています。

就職指導ではなく 就職後を見据え指導を

司会 高校では進路指導を通じて、将来の夢をどう実現するかを生徒に考えさせています。こうした経験を持つ生徒を受け入れる大学には、どのようなキャリア教育を望みますか。

塩原 私が大学に対して希望するのは、職業人教育です。現在、大学が行っている就職支援は、就職するためのテクニックの指導になっているのではないかと思います。大切なのは就職後の生き方です。どの職業を選び、何をやるのかを考えることは、どう生き

るかにつながります。そのためには、厳しい社会の現実を教えることも必要です。

社会では必ずしも自分の望む仕事に就いている人ばかりではありません。望む仕事でない場合、すぐに辞めたくない気持ちをどうやって乗り越えていくか、そのためにはどういう力を付けなくてはいけないかを考えさせる必要があります。そうすれば、就職して3年で辞めてしまうような人は減るのではないのでしょうか。高校でもやるべきことでしょうか、大学では専門的な学問と並行して、このような教育もしてほしいと思っています。

飯島 今は高校卒業者の半数以上が大学に進学し、そのほとんどが大学卒業後は就職しようと考えています。ですから、大学1年次から就職を前提にしたキャリア教育を行っていく必要があると思います。

入試難易度が高い大学を卒業しても就職できない学生がいると聞きますが、学生側も社会性やコミュニケーション力に欠け、融通もきかないのではないかと感じることがあります。実社会では、仕事をさせてもらっているという謙虚な気持ちや奉仕の気持ちを忘れず、常に向上心を持って、相手を大切に作る姿勢で仕事をすべきです。ただし、塩原先生がおっしゃるように、これは大学任せではなく、高校でも指導すべきことだと思います。

荒木 私はこれまで生徒に対して、自己理解を通じて自分の適性に気づき、将来について考えるよう指導してきました。しかし現在は、周囲の人を理解することによって自分や他者を理解するほうが良いと感じています。この点から、大学のキャリア教育の一つとして、地域と接点を持った活動も有効ではないかと思っています。地域の人たちとコミュニケーションを取り、意見を発するという経験が、その後生きてく

るはずで。

野村 確かに他者理解は大切です。本校では教員との面談を通じ、また企業の人事担当者と話すことによって、生徒の他者理解を進めています。

乙黒 それはコミュニケーション力ということだろうと思います。大学は専門的な学問の場ですが、専門だけに偏るのではなく、違う学科やゼミの学生とのグループワークなどを通じて、異なる立場や異なる見方をする人とのコミュニケーションを深めていくことも必要でしょう。それは自らを鍛え、高めることです。こうした人材育成システムを持っているということは、大学にとって大きなアピールになるでしょう。

野村 本校で行っているセミナー形式の就職ガイダンスの後、生徒は社会で通用するためにはコミュニケーション力が重要だと感じるようです。大学ではそれを実際に伸ばす機会をつくってほしいと思います。

荒木 いわゆる「出口教育」的なキャリア指導ではなく、就職後の生き方、つまり社会で通用する人材を育成するという視点でのキャリア指導をすべきだろうと考えます。

塩原 同感です。就職までに、社会で通用する力を身に付けることは非常に



塩原 秋雄 教諭(群馬県立高崎北高等学校)

重要な問題です。今、社会や企業が求めているのは、自ら学び、考え、意見をまとめることのできる人材でしょう。大学は社会に出るまでの4年間を過ごす場所ですから、学生にこうした力を付けさせて、伸ばしていただきたい。学生時代にどれだけの力を身に付けたかということは本人の自信になり、就職にも役立つでしょう。

例えば、レポートは、資料を写しただけのものは許さない姿勢をしっかり持っていただきたい。大学が求める水準に学生の力が満たなければ、単位を与えない、進級させないという選択をすべきだと思います。甘くすると、学生は社会でもそれが通用すると思ってしまいます。社会の厳しさを理解させることも重要なキャリア教育だと言えます。私は卒業生が来校すると、普段の授業の様子や宿題の有無などを尋ねます。厳しい大学ならば、生徒に勧めることができます。

最近、自ら考えて動く者が減っているように思うので、自ら考えて動く習慣のある若者を育てることも大切です。大学の4年間はそれを身に付けるための時間ではないでしょうか。

飯島 理想的にはそうかもしれませんが、しかし、少子化が進んで甘やかされて育っている子どもが多いのも事実です。あまり厳しくすると中退してしまうのではないかと心配して、厳しくできない大学もあるのかもしれませんが、ただ、大学によっては、厳しい教育によって学生の能力を大切に伸ばそうとしていると聞いています。そうした取り組みはぜひ力を入れて行っていただきたいと思います。

大学のキャリア教育は大学選択に影響する

司会 キャリア教育に力を入れる大学が増えていますが、特色あるキャリア教育は大学選択の視点の一つになるで



荒木 隆 教諭(群馬県立前橋高等学校)

しょうか。

荒木 本校の場合は、医学部や薬学部など、資格と直接結びつく学部学科をめざす生徒以外は、将来の職業の幅を狭めず、大学あるいは大学院で学ぶ中で自己実現の場を見つけてもらいたいと考えています。

そういう意味では本校の生徒に限ると、キャリア教育は大学選びの重要な視点ではないかもしれませんが、ただ一般的には、資格取得に直結しにくい経済学部や文学部などの場合、キャリア教育の内容も重要な視点になり得ると思います。

飯島 先日、立教大学が作製した冊子を拝見したところ、卒業生の進路のデータが載っていました。そこには、就職した学生や大学院へ進んだ者のほか、一時的な仕事に就いた者や進路が不明な者の割合も明記されていました。すべての大学がこのようなデータを出すことは難しいかもしれませんが、高校側は生徒のために正しい情報が知りたいという希望を強く持っています。

また、就職難のため、いわゆるブラック企業に就職する学生も出てきます。そういう卒業生を出さないためには、他大学との情報共有も必要でしょう。大学がこうした取り組みをしてい

ることがわかれば、安心して生徒を進学させることができます。

学ぶ姿を伝えるリアルな情報が有効

司会 進路指導を行ううえで、大学のキャリア教育に関してどのような情報が必要だとお考えですか。

乙黒 正直なところ、就職率のような単純に数値化された情報には、特に関心はありません。卒業生の就職実績に名だたる企業名が並んでいれば、「頑張っている大学だな」とは思います。しかし、それよりも卒業生の就職先での活躍の様子が知りたい。卒業生が職場でどのように貢献しているかという質的な情報こそ重要でしょう。

本校にも大学の教職員や進路アドバイザーの方が訪れます。その大学に進学した卒業生の活躍や大学の指導内容、あるいは訪問された方の人柄などから、「この大学なら信頼できる」と判断することはあります。対面して話すと、単純に数値化されたデータからはつかみにくい情報を得ることができると思います。

荒木 確かに数値データなどの情報は大学案内やインターネットから、十分に知ることができます。それよりも、実際に大学に通う者に会って聞く生の



乙黒 晃 教諭(栃木県立足利高等学校)

情報のほうが有効でしょう。

先日、山形大学の修士課程で工学を専攻している本校の卒業生が、大学案内のために訪れました。説明内容は事前に講習を受けてきたようですが、実際に顔を合わせて言葉を交わせば、用意された説明以外の話も聞けます。これはまさに生の情報です。彼は自分が学んだことを楽しそうに生き生きと話してくれたので、大学の良さを実感することができました。

これはキャリア教育に限定した情報ではありませんが、大学をアピールするためにはかなり有効な方法だと思います。出身校に限らず、出身地域の学校に広げても有効な広報戦略となるのではないのでしょうか。

塩原 私が知りたいのは学生の満足度です。やはり生の情報が卒業生から聞ければ、進路指導に役立ちます。私は可能な限り卒業生とのネットワークをつくって、話を聞くようにしています。大学生活に対する感じ方は人それぞれですから、実情を知るのには難しいと思います。それでも、講義内容や就職支援、キャリア教育などについて、ある程度の相対的な評価がわかるのでいいと思います。

野村 実際に学生の口から話される言葉や情報は、とても大切です。本校では以前から生徒を出身中学に行かせています。彼らは、中学校の先生や後輩に、授業の内容や高校の先生について自分たちが感じていることを話してきます。先輩の高校生活の体験話は、聞いている生徒に実感を伴って響くはず。これと同じことを大学が実施するのは、ある意味、当然ではないのでしょうか。

飯島 学生が、大学の授業について母校の後輩に聞かせるのは良いことだと思います。ただ、その機会を増やすことはなかなか難しいでしょう。ですから、大学の各学年でどのような教育を



飯島 千尋 教諭(長野県・私立佐久長聖高等学校)

行っているか、キャリア教育としてどんなことをしているかという具体的な内容をデータベース化することが有効ではないでしょうか。

ある大学では、1年次にレジュメの書き方やレポートのまとめ方などをしっかり指導していると聞きます。キャリア教育についてはもちろんですが、そういった具体的な内容をデータベース化すれば、多くの人が目を通すことができ、大学選びの助けになると思います。

野村 キャリア教育は、さまざまな学習の中で行うことができます。大学ならゼミやサークル活動、あるいは講義でもできるでしょう。実際、私は面談や進路指導だけでなく、授業でも、進路について考える場を提供し、キャリア教育をしています。

私は生徒が変わるためには教員も変わらなくてはいけないと思っています。本校では教員を対象にした研修会を行っています。大学でも、ぜひ高校の取り組みを見て、現実的なキャリア教育をしてほしいと思います。

司会 高校の現場ではどんなキャリア教育が行われ、また大学に対して何を求めているのか、貴重なご意見をたくさん伺うことができました。ありがとうございました。